

expenditure が低下するとき、全社會の總貨幣所得が減ると考へる理由はないから長期をとれば他の生産部門で費用が高まり、そこで労働に對する需要が出てくる——ダービンが費用を特に賃銀として全く相對的に考へてゐること、相變らず資本を單なる生活資料と考へてゐることが明かである。長期をとれば他の生産部門でも費用が下がらねばならない。然るに彼によるとそれが上つてゐる。利潤がどこかへ消えてしまつてゐる。機械を論じながら機械がないのだ。

——第三に、長期をとつてみれば、労働は以上の如く到る處吸収せられ、労働時間は若干短縮されてくる。(P. 180—181.)

ダービンが抽出した第二の結論は、労働賃銀を切下げずにとつておいて、労働時間を労働生産性の増大しただけ短縮するといふ方策は、生産物も利潤も賃銀も従前のまゝといふ事態をもたらす。それはよしとするも労働時間の短縮なければ低下したであらうほど生産者の費用 *producers' costs* が低下しないと云ふことであつた。云ふところの生産者の費用とはダービンに於て、賃銀以外のものではない。彼は労働時間を短縮すれば賃銀が上るといふことに苦情を云つてゐるのであるが、彼はこのことから、かく生産費が低下しない以上は、國民經濟なるものが外國貿易に依存してゐる限り、上述の方策は行はれえず、若し行はれるとするなら、それ

は國際的に協定してのみ行はれるのであり、假令それが國際的に行はれても生活水準は餘暇を生じるのみで向上しない。特別餘暇はある犠牲を含むもので、それは生産的能率を高めるために必要であることを力説するのである。(P. 182—184.)

「機械の問題の解決であると同時に生活條件の急速な、そして見るべき改良の可能性を聞くやうに思はれた」ところの方策の眞價は經濟學者ダービンによれば斯くの如きものであつた。然し乍ら、彼の論理は自己否定的にのみその結論をひきだしてゐるのである。即ち、機械を採用してその効果だけ労働時間を短縮すれば彼の云ふ如く生産物の分量はそのまゝだらう。そのとき賃銀と利潤はそのまゝであるだらうか。資本家的交易經濟を前提にすれば、機械は賃銀節約のかぎり採用される。そのまゝと云ふことはない。假りに賃銀も利潤もそのまゝといふことにしようなら、その場合生産費の低下しないのは當り前である。

ところで、形式的に一方の生産費が高まれば他方は低下するといふ彼の論法を使用すれば、國民經濟全體としては生産費はもともとで、別に賃銀をそのまゝに労働時間を短縮するからとて外國との競争に負ける心配はないのである。若しそれ國民經濟全體として彼の云ふ生産者の費用即ち賃銀が上ることになつたら、それこそ生活水準の向上ではないか。



問題は、生産費が賃銀であるといふジョン・ミル以來の、そして現在も英吉利經濟學を支配するこの學說が資本家的交易經濟のもとに何を理解してゐるかにかゝはる。

\* ダービン最近價值論に關聯して、「市場に衝突すべく否定的選擇を許すための装置が殆どつくられてゐないといふことが我々の經濟の最も特徴とするところである。」と述べてゐる。(E. W. M. Durbin, *The Social Significance of the Theory of Value*, *The Economic Journal*, December, 1935.)

ひとはあるフィルムを観るために支拂をし、かくてその映畫事業を發展させることができるが、然し、フィルムを観ないために支拂をし、かくてその製造と公開を妨げることができない、と云ふのである。需要は何處から來るのであるか。また云ふ、「機械が産業的に採用されたことによつて、逆に影響されたすべてのものによつて備されたところの不効用 *disutilities* がその市場評價のうちに自動的に含まれるやうな機械はない。而もそれは消費者の選擇なのである。」云々。かゝる經濟學は機械採用の必然性を説明できないのであらう。それは機械が「不効用」をふくむことをはつきりと承認しつゝ、而も補償の行はれることを説くのである。

かくダービンが上述の方策が國際的規模に行はれても餘暇を生ずるだけで生活水準は向上せぬといふとき、彼の命題は成立せず、彼が特別の餘暇はある犠牲を意味し唯一の合理的な利用ではなく、それにはより大なる生産的能率がもたらしうることを理解することが萬人に必要であるといふとき、彼は労働時間の延長乃至労働の強化を要求するものと云ふのはかないのであ

る。さればダービン自身も、かくては讀者はオーソドックスの經濟學者から教へられるのは無政策・無變化であると云ふかも知れぬと氣を廻し、「機械の統制」を提案するのである(P. 184.)

然らばこの經濟學者によれば是正さるべきものは何であらうか。

まづ第一に失業の存在である。上述の如き經濟學說の結果として、彼によれば、「それが機械の採用にもとづくといふことは考へえられぬところである」(P. 188.) 失業は景氣變動に基くものであり、若し機械が失業に責任があるものなら、失業は循環から循環へと増大せねばならぬが、さういふ事實は、ダービンによればない。而も新資本の設定が、假令時間と場所とに限定があるにせよ、失業をもたらしうことあるは事實であつて、此の意味に於て機械は失業の唯一の原因ではないが一原因なのであり、「經濟學者はかゝる型の失業の起るといふ問題を考へねばならない。」(P. 187.) のである。補償説はグルチックに於ける如くその意に反して否定された。かくてダービンは、次いで機械がある種の人々にとつては「永久の失業」(P. 187.) を意味することを認めるにさへ到る。彼はこのために労働の動きに對する統制と調査の必要を説き、機械による代置が行はれる企業の負擔に於て労働者の補償が保證されねばならないと云ふのである。彼の提案はこゝに止まらず、例へばある産業に於て平均労働者がn年間勤務するとすれば、毎年労働者の



1-11が交替することになるから、機械の採用をこれに歩調を合すことができればよいといふことを述べてゐるが、この後者の提案は資本家社會に於てどれほどの意義をもつであらうか。ダービンは、第三に興味ある問題を取りあげてゐる。即ち、彼によれば經濟學者は新機械の採用が全體としての經濟を利益すること、また結局労働者によつて消費される商品量を増大することにより労働者を利益することを示すことができたが、然し勞賃と利潤との相對的な頒け前は如何と云ふのである。ダービンによれば、生活費及び完成生産物の價格が固定してゐるなら、労働の頒け前の絶對的增加は労働者の全貨幣收入の増加を伴ふ。だがこれは經濟學ではなくてタウトロジーである。資本家的交易經濟に於てどうであるか、問題である。曰く、「生活費は貨幣賃銀より急速に低下するだらうから、實質賃銀は上るだらう。然し資本の裝置は貨幣賃銀をおしよげる傾向を有つたらう。」(P. 192)結局、生活費と共に實質賃銀は低下してゆくたらう、と云ふのである。而も、彼によれば十分に計劃された經濟のもとに價格を安定させるか、貨幣賃銀はより自由に動くことが許されるか何れかの途がとられるであらうが、いづれにせよ！相對的頒け前の變化から起る特殊の困難を取り除き、機械をして十分にその經濟的機能を發揮せしむるだらう(P. 192-193)と樂觀されるのである。

第四に、そして最後にダービンによれば、機械が熟練労働を全く排除したといふことは全くは眞實ではない。眞實は機械によつて労働者は技師と番人との二種にわけられたといふことである。そして機械化が労働を強度化したにしても、高度の生活水準には機械化は不可欠であると云ふのである。(P. 193-195)

ダービンはグルチックと符節を合して、補償説の論據のもとに補償説それ自らを否定しつつ、週四十時間労働制の提案を否定した。而も自ら積極的に提案した第一から第四に於て、彼の説くところは計劃經濟以外のものではない。この自己が自己を否定するといふ矛盾は抑々何に基くのであらうか。

ウイリアムス編纂の「人間と機械」は第三部の觀察者の最後に、W. ラファエルの餘暇に關するものを蒐録してゐる。「機械が複雑になつてくるにつれて、そして人口の一人當りの生産が明かに増大するにつれて、労働時間が著しく短縮すること、そして退屈の問題はそのとき餘暇の時間に変ることが一般に想定される」(P. 206)と云ふのである。

我々は上述したところに於て、英國に於ける最近の機械論の傾向を辿つてきた。そのうちワトソンは理論的に問題にならないが、ブラウンは原則として補償説を認め、ステューアートはこ



れを否定し、ウィリアムスの書に寄稿した十一名のうち、労働者、労働組合側の意見を代表する五名は補償説に正面から反対し、企業家側に於てもハロルド・ポウデン卿は補償説の誤りを認めてゐる。このなかにあつて、経済學者ダーピンは補償説の否定された事實を認め乍らも補償説を説いてゐると云つた状態である。

而して興味深いのは、英吉利に於て、機械の問題が文明の進歩にともなふ餘暇の問題としてとりあげられてゐることである。

### § アルフレート・ケーラーの業績

アルフレート・ケーラーは、最近亞米利加に於て、「解放説の統計的實證はそれ自身繁榮期に限られねばならぬか、又はその證據固めをするのに恐慌中に發展した失業を利用してよいか」との問題について一つの論文を發表した。(Alfred Kahler, The problem of verifying the theory of technological unemployment, Social Research, Nov. 1935, Vol. I, No. 4)

ケーラーがこゝで用ひた論法は、「自づからこの問題に對する解答は、純統計的基礎の上には與へられない。我々は先づこの解放説が機械は失業をつくりといふ命題のために説くところを

考へねばならない。その時にのみ我々は、この理論を統計的に證明するために如何なる手続きが必要か、また如何に多くの失業が最も好事情の場合にも機械化と結合されるかを知るであらう」と云ふにあつた。彼はこゝで「解放理論の基礎」として次の三つをあげる。ケーラーの説は次の如くである。

第一は The Aggregate Demand Argument と稱するものである。この説の主張するところは、要するに生産物の價格が低下する場合、補償に必要な通貨の膨脹はそれほど大であることとを要しないとは云へ、若干の通貨量の増大なくしては補償は殆ど可能でない。蓋し技術的進歩は通例生産財の取引を増大するから、といふのである。價格が低下する場合にも、その低下が生産性に於ける増大 *rise in productivity* より急速に行はれぬ限り——この場合恐慌となる——通貨の膨脹が必要である。事實、價格は労働費用ほどは低下しない。蓋し、より高い生産性は通例より大なる資本投下によつてなされ、利子支拂の増大の結果貸銀に於ける節約だけ費用及び價格をさげることはできないのである。この説と景氣變動との關係は、信用が膨脹しつつある繁榮期には補償作用が急速に行はれるが、これに反し、不況期にはデフレーションのために労働解放が引き延ばされるといふことにある。



第二は The Capital Argument と稱するものであつて、リカルドに於ける流動資本の固定資本化、マルクスに於ける可變資本の不變資本化の問題である。要するに資本の蓄積には時間が必要で補償は直ちに起りえないことを説くのである。この説の論理的正當さは殆ど疑ひないところであるが、その統計的確定は極めて困難である。必要な技術的準備の不足の故に失業が起るのを示すことが必要であるけれど、レオプ・グループやブルッキング・インスティテューションの研究によると、合衆國では一九二九年に於てさへ、失業は僅かであつたにも拘らず、物理的生産能力の可成りな豫備が利用できる状態にあつた。(Harold Leob, The Chart of Plenty. New York: Edwin G. Nourse, America's Capacity to Produce. Washington. 1934.) これは矛盾の如くであるが、生産能力はあらゆる種類の工場ではなく、現在の市場の條件で活動するに足るだけの近代的なもののみを含むと解釋さるべく、技術的進歩から取り残された工場は経済的に死んでゐるのである。生産能力をかく考へることは生産豫備の統計的測定を複雑ならしむるが、利潤をもつ經營の實行可能性を考慮にいれない統計は價值がない。こゝでなほ失業の週期性的問題がとりあげられねばならない。失業の増大は、何等かの理由で生産性の増大がその性質上週期的でない以上、絶えず進行すると假定されねばならぬが、その理由は技術的進歩の成果は資本財に

對する準備の時期の終りに高まるといふことである。リーダーはインフレーションの價格によつて舊式の工場の眞實の利潤は蔽はれるから失業は繁榮期中延期されると述べてゐるが、價格の下落、競争の激化とともに、舊式の工場は破棄され失業は大衆現象となる。然るに新に蓄積された資本は、各の労働單位が相當大きな資本準備を必要とするから僅かの就業の機會を與へるにすぎない。

第三は The Disproportionality or Underconsumption Argument. と稱せられるもので、それ自體が循環の全理論をなすものである。これは補償が常に全體の需要が減るからのみではなく、所得の分配と生産組織の生産額の構成との矛盾によつても妨げられることを説くものであつて、「これが通貨の量にかゝる以外の問題を含むことは、とりわけ明かにナイサーによつて示された。」(Hans Neisser, General Production. Journal of Political Economy. August. 1934.) 不均衡は、労働への節約が總及び純生産物への賃銀の預け前を減らすことに基くと云はれる。かくして結果した消費者購買力の弱まりは、賃銀から節約された基金が財産所得への追加として市場に再び現れないならそれは直ちに市場の停滞を齎す。然し新所得は大部分個人給付や住宅建築に支出されるか或は工業や農業に投資されるから、需要の構成に變化が起る。個人給付・住宅建



築への需要の擴大は資本準備の増大を必要ならしめずして補償に好都合である。同時にこの補償作用によつて消費財市場の停滞は防がれる。この均衡は然し乍ら、個人給付の需要の繼續、住宅建築その他の生産活動への繼續した投資に基くのであり、機械化の作用は停止せぬが故に資本投下にゆく所得の頒け前は増大してゆかねばならない。新家屋は新借家人を、生産への新投資は消費財へのより大なる有效需要を必要とする。然し消費者購買力は弱まつてゐるから、市場は困難となる。此の問題に對抗するために、より大なる資本基金とより大なる商品のストックとをもとめて、分配機構は擴大される。この取引の増大はそれ自體追加的補償作用である。最後に月賦販賣の發展がある。然しこれらの途は行き詰り、消費と生産との不均衡はそれ以上の投資を利潤ならしめる。かくて補償作用は止む。これは消費者需要の減退と投資の機會のさらになくなることを意味する。——それにも拘らず資本の絶對的過剩供給と云ふものはない。生産と消費能力との調整の缺乏は資本の大きさに拘りなく投資の機會を壞すのであつて、この第三説は第二説と矛盾するものではない。補償のための新資本蓄積に時間が必要といふことは、純生産物への労働の頒け前をすくなくしておくことを企業家に可能ならしむる條件であり、それはまた投資が大規模に行はれるときにのみ資本基金は利用されるといふ事實に對して責任を負ふものである。

負ふものである。

他方この説は、繁榮期の終りに消費財の缺乏が始まるから、高次の財貨の生産は停止せねばならぬといふハイエックの景氣理論に矛盾するが、然し恐慌の統計、とりわけ最近のものゝそれはあまりにもこのポエムハイエックの理論を裏切つてゐる。第一の全體の需要が増加しないといふ説がこゝに再びもたらされねばならぬ。若し信用の量並びにそれとともに購買力の量が生産の機械化とともに平行して擴大されなければ、消費財市場の停滞はもつと早く始まるであらう。

ケーラーはこゝで實證の問題にとりかゝる。

彼は戦後の亞米利加に於ける驚くべき生産性の増大について失業と技術的發展との關聯を、一八九九年から一九三四年に到る製造業について圖示してゐるが、それによれば、一九二〇年頃までは一致してきた生産量と従業員數の曲線は、その頃から離れて、生産の擴大はそれに伴つて労働人口を必要としなかつたことを示してゐる。彼はさらに一九二〇年から一九三五年に到る亞米利加の製造業に於ける労働者一人一時間あたりの生産高の曲線を圖示してゐる。因みにこの曲線は、製造によつてつけ加へられた純價值にもとづく純生産性の曲線とは區別されね



ばならぬ。機械化は労働一時間當りの材料の消費を増大する傾向があるから、純生産性の増加は總生産性の増加よりすくないであらう。——それは全期間について異常な増大を示してゐるが、一九二三年、二五年、二九年にみられるやうに、繁榮期が生産性の増加にとくに好都合だつたといふことは示されない。然し、一九三三年の増大がその年の通貨及び貸銀政策によることを認めても、最近の不況の間の曲線の急速な増大は著しきものがある。かくて恐慌失業の著しい部分は、繁榮期に於ける破綻の後はじめ、そのとき始まつた生産性の増大の結果としてもたらされたといふことが示される。一九三三年—三四年に於ける一人一時間當りの生産高は平均して一九二九年のそれより二五%以上高いが、このことは同じ生産量を以て、就業機會二〇%の低下を示すものであり、不況の間、全體の需要の増加による補償は行はれなかつたから、この数字に相當する現在の失業の一部分は、直接機械化又は合理化一般に歸せられる。キングは一九二九年の終りに比較的僅かの失業が存在したのみで、それ以後起つた失業は機械化には殆どかゝりなく、不況中の生産量の減退の結果であり、「我々の古いそして不健全な貨幣制度による害悪を、生産方法に於ける技術的改良の責にするのは不合理である。」と云つたが、これに反對して現在の失業の大部分は一九二九年以後に起つた補償されない労働の結果であると説いた

スターンの説の正しいことを證明するものである。(W. I. King, The Relative Volume of Technological Unemployment; Boris Stern, Technological Displacement of Labor and Technological Unemployment, in Journal of the American Statistical Association, Proceedings, 1933.) 若し、例へばワイントラウプがしたやうに一九二〇年まで遡つて、一九三一年と比較するなら、生産性の増加七八・八%、四四%の労働の排除となる。(David Weintraub, The Displacement of Workers through Increases in Efficiency and their Absorption by Industry, Journal of the American Statistical Association, December, 1932.) 繁榮の絶頂にあつた一九三三年と比較しても生産性の増加四三%に對し、それは三三%の一人當り労働時間の減少を示してゐる。現在の恐慌中の生産量の一九二三年の水準からの低下は、一人當り労働時間に於ける僅か二三・五%の減少として説明されるが、こゝに問題となるのは、現在の生産性を以前のそれと比較して現在の失業率を説明する場合、若し一九二九年に於て労働者が全部雇はれてゐたなら、補償説の立場からは機械による労働者の解放はそのときまでにすつかり補償されてをり、その後の失業を説明するわけにはゆかず、そのときは、一九二九年以後に發展した一人當り労働時間二〇%の減退があるのみで、就業の減少は生産量の收縮に歸せられる。こゝで製造業の生産量と一人一時間當りの生産高とを一九



一九年から一九三五年に到るまでグラフによつて比較するに、一九二三年及び一九二九年の記録的な繁榮の時に於ても、一人當り労働時間の就業機會は殆ど一九二〇年の平均に匹敵する。反對に一九二〇年の労働需要はそれ以後に比して著しく高い。製造業に於ける就業機會の減少は、直接、労働統計局 Bureau of Labor Statistics の就業指數からも認識されるところで、このことは一九二〇年と一九二九年との間に、生産量の著しい増大にも拘はらず、そして就業人口が一七%増加したに拘らず、製造業に於ける就業機會は減少したことを意味する。それ故繁榮期についてみても製造業に於て補償を云々することはできない。何故恐慌が高い失業數を示したかも知つから理解されるのであるが、解放説の意義は一九二九年以後を考へるとき完全に明かになる。生産性の曲線はより上昇し、生産量を置き去りにしてゐるのであつて、後者が生産性の曲線に追いつく時があるかどうかを疑はしめる。單に一九二〇年の一人當り労働時間の就業機會に達するだけで、八〇%乃至九〇%の生産の増大がなければならぬ。そしてこれは生産性がこれ以上その間増加せぬことを前提にしてゐる。このことは急速な合理化の失業に及ぼす影響を統計的に明かならしめるに足るものである。補償説の側からは補償が製造業自體で行はれる必要がないと云はれるが、反對に製造業は解放の行はれる唯一の分野ではなく、ジ・ローム

は一九二九年に、機械化は農業、鑛山業、鐵道に於て、製造業より激しく行はれたと述べてゐるのであつて、(Harry Jerome, Mechanization in Industry, New York, 1934.) 労働統計局の調査によれば、農業に於ける生産性の増加約二三%、二、五三〇、〇〇〇の人員の代置にあたる。これは事實上は生産の擴大により八〇〇、〇〇〇であつたが、生産量の減少をともなつた炭坑業に於て事態はもつと悪いわけである。これらの事態にも拘らず、比較的僅少の失業しか一九二九年になかつたとすれば、部分的に補償が行はれたからで、例へば商業及び運輸業に於ける就業の割合は一九二〇年から三〇年に、一八%から二〇・七%に、家庭並に個人給付に關しては八・八%より一一・三%に増加し、建築業は一九二八年に時を越したといへ一九二九年まで非常に活潑であつた。これらの部門に於ては労働單位當り殆ど資本を必要としないので補償を容易にするが、就業は消費者の高い所得にまた建築業では増大した投資に依存する。このことは然し乍ら資本財の製造に於ける擴張のやうに、全經濟を循環變動に敏感ならしめる。繁榮の最近の段階を特徴づける均衡はそれ故不安定なものである。然しこのことは未だ機械自體が一時的にもたらされた均衡の決定的な崩壊をもたらすといふことを證明するものではない。

生産性のグラフからして、機械化は繁榮期中行はれ、若干の準備期間の經過後、恐慌をもた



らす廣汎な労働者の解放が続くといふ説は殆ど支持されない。如何にも一九二九年には生産性のそれ以上の増大はなかつたけれど一九三〇年に於ける曲線の低調は恐慌が生産性の異常な向上によつて特徴づけられるといふ見解と矛盾する。一九二三年の循環に於てもこの増加は繁榮の頂きに先行した。一九三一年から三三年に起つた生産性の増加の技術的必要條件は既に恐慌以前になされ、その第一の結果は、一時的にその歸結のそれ以上の展開を禁止した恐慌だつたと云はれるが、この推理はもつともでなく、生産性の曲線は、合理化の時期に舊くなつた資本は不況期に破棄されるといふレーダーの説を裏づける。生産性の曲線の急速な増大は、この間により能率的な工場が市場を支配する事實を示すものであるが、舊資本の破棄は、生産の退歩失業の増大を意味する。それ故機械化は、不況中労働の増大した生産性によつてのみならずそれが資本準備の破棄と生産活動の収縮を強制することの故に失業をもたらすのである。生産の全減退はもとよりかくの如くして直接合理化にまで遡るといふわけにゆかない。——なほ不況期に於ける生産性の全増加が舊資本準備の排除に基因するのではなく、機械化は繁榮期に特徴的であるといへ不況中にも進行する。廣義の合理化——生産装置をひきしめ、労働を強化する等——は、その上加へられるのであつて、これは不況中特に活潑になされる過程である。

かゝる手段は、繁榮期の機械化に殆ど劣らず生産性の増大に寄與する。なほ、不況中に於て、より能率の高い労働者にのみ就業の機会があり、これが生産性の増大に役立つこと云ふまでもなく、かくて、就業が増加するときには労働力の能率は生産性ととも増加するといふ結論があるのであつて、このことは一九三四年と三五年の合衆國についてみてあてはまるのみならず、一九二五年から三四年にかけての獨逸製造業に於ける一人一時間當りの生産高の曲線についても實證される。

ケーラーのえたる結論は次の五つに要約される。

- 一、上述の合理化中に於ける技術的進歩に對する補償は異常な生産の急速な擴大を必要とするものであり、それは合衆國に於ては一九二〇年に比し一九二九年に於てもえられなかつた。
- 二、合理化が引續き行はれた故、上述の補償は不況中行はれなかつた。一九二九年以來の發展によれば次の繁榮期に於て不況期以前の雇傭の機會は製造業に於てみられないだらう。
- 三、機械化の結果舊式となつた資本準備は不況中に破棄され、この期間中機械化は生産量の収縮をもたらした。

四、機械化は經濟の構造を景氣變動により敏感なるやうに変化せしめた。



五、「労働解放理論によつて恐慌の發端を説明するためには、全不均衡乃至相對的過剩資本化説を受け容れることが必要である。後者の證明はこの論文の範圍を越えてゐる。なほかつ我々は労働解放理論がある興味深い理論的可能性を提示するのみならず、經濟構造の最も積極的な要素の一つを適切に取扱ふことを示したと信する。」と。

我々は以上に於て忠實にケーラーの説を紹介してきた。ウラヂミール・ウイチンスキーは北米合衆國について、「一九二九年以後技術的失業は殆ど増加してゐない。何故なら、技術的進歩（これは就業人口一人當り平均生産高にのみかゝる）が停止したから。大變な失業の増加は、従つて全く經濟的要因、不況に基因した。」といふ結論をだしてゐるが、「技術的進歩の結果としての人間労働の消去——或は解放——は決して最近時に特有のことではない。それは寔に經濟的及び社會的發展の進行に於ける本質的な過程である。機械の普及がなかつたなら、恐らく世界の生活標準は上らなかつたであらう。十九世紀は、まことに技術的進歩の王國に於ける奇蹟の時代である。然し労働者のある生産部門からの解放が、新部門の創設及び全體としての生産の擴張によつて十分均衡をとられる限り、技術的失業の問題と云つたやうなものはない。假令均衡が一時的に妨げられても、結果は若し進歩を欲するなら國民が拂はねばならぬ犠牲の一部とみなされ

る。戦後に於ける合衆國の生産發展の最新の特徴は、好況期の眞最中に均衡をとる機構が打ち挫かれたことであり、生産の擴大は労働に對する特別の需要をつくらなかつたことである。」と述べて「一九二〇年から一九二七年に到る間に、合衆國に於ては機械によつて人間労働が工業生産から閉め出された」次第をかのフリーバーの創意のもとにつくられた「Recent Economic Changes」二卷その他によつて仔細に立證してゐる。（本書一二六頁參照。W. Woytinsky, Three Sources of Unemployment, Geneva, 1935, P. 40—61.）補償説に對する批判は、歴史そのものによつて果されたのであり、こゝに近代國家がなさねばならぬ諸々の重要な任務があるのである。ところでケーラーは上述の如く補償説に對する三つの反對論據を紹介し、「其れを統計的に確證すること又は拒否することは殆どあらゆる經濟上の與件の顧慮を要求する」ものであり、解放説を理論的に彫琢することは、「貨幣及び信用現象、資本量及び資本を含む關係、所得の分配及びその分配に於ける不均衡、生産性の増大、失業の範圍等に關する主張」をなすことで、「解放説の正當な評價はつねにこれ等の主張のすべての評價を要求する。」と云つてゐる。ケーラーは既に上述した如く「機械による労働者解放の理論」一九三三年の著者としてこの問題の専門家であり、その説の大要は、そのポエム・パウニルクの生産手段に關する説に對する若干の批評と共に既に



この圖に於ても紹介されてゐるところである。(柴田敬、理論經濟學、上巻、二八三頁、二九四頁、三二六―三三四頁、參照。―因みに、この書には、シスモンダイ、セイ、パスチャ、リカルド、J・B・ミル、マンゴルト、マカロック、マルクス、ケーラー等について補償説の問題に關する詳細な紹介と吟味とがある。―)紹介者はそこでケーラーについて、「機械に依る労働者の排除の問題が、技術的保持資本組成の高級化の問題と、技術的消耗資本組成の高級化の問題とより成つてゐると言ふ事は、從來充分に意識的に展開されなかつたのであるが、此の點に於いて一步を進めたのは、私の知る限りでは、ケーラーである。ケーラーは、保持資本額と消耗資本額との區別を意識的に考慮に入れて次の如く述べてゐる。」「ケーラーの説には幾多の缺陷があるのであるが、機械の採用に因る生産的労働力需要減少の問題に含まれる資本回轉期間の問題の面を、意識的に採り上げた功績は當然認められねばならない。」(傍點は原著者)と評價されてゐる。然し乍ら、機械に依る労働者の排除の問題に、資本回轉期間の問題をもたらし、技術的消耗資本組成の高級化の問題をとり入れることは、直接的生産過程の問題を流通の問題に解消し、再び補償説を採用することにならないであらうか。

「機械は(労働を排除せず、と爲す説の)誤謬は、一社會の純所得が増加する時には其總所得

も必ず増加するであらう、との認定から生じてゐる。」「一國の總所得をば減少せしめずして、純所得を増加せしめる事が出来たならば……凡ての階級の境遇は改善せられるであらう。」といふリカルドの言葉に對し、「機械に依る労働力の排除と、機械に因る總所得の變化との間には、何等一定の必然的關聯は存在しないのであるから」「所得の變化に因つて資本額が變化されると言ふ點を捨象しつゝ主張されたるものとして」「リカルド説を見るに、然る限りに於ては、それは誤である。」「(三〇九頁)と斷ぜられ、「一國の純所得のみならず、其の總所得も増加しながら、猶且、労働に對する需要が減少しうるのである。それは即ち、人間の労働の代りに馬匹の労働の使用される場合である。」といふリカルドの言葉をひき、リカルドはこれが「一般的にも妥當するものである事を充分に意識しなかつた。」「(三〇九頁)と云はれる。これによつて、著者は、機械そのものが然らざれば労働者の消費すべき財貨を、それが生産するよりもより大なる分量で消費する場合が一般的であると云はれるのである。然し乍らこのことは寧ろリカルドが新機械論に於て承認したところではないであらうか。寧ろリカルドに對して云はれねばならぬことはマルクスの次の言葉であるやうに思はれる。

「シニェルプーリエはラムゼーと全く同様に、ラムゼーの謂はゆる流動資本たる(生活資料の



量] (l'approvisionnement) が少なくとも資本總額に比例して減少するのみならず、機械が絶えず労働者を放逐するかぎりにおいては絶對的にも減少すると認めてゐる。しかし、彼はラムゼーと同じく、生産資本として充用される生活資料の量が必然的に減少すると考へてゐるやうである。けれども、かやうなことは決して起らない。こゝでは、總生産物のうち、資本を補償し資本として充用される部分と、剩餘生産物を表現する部分とが、つねに混同されてゐる。「生活資料の量」が減少するのは、資本の大部分すなはち總生産物のうち資本として充用される部分が、可變資本としてではなく不變資本として再生産されるからである。剩餘生産物の大部分、すなはち生活資料から成る部分は、不生産的労働者や非労働者によつて食ひつくされるか、または奢侈品と交換される。それだけのことだ。」

「資本の構成部分の區別にあつて重要な點は、直接の生活資料の生産におけるよりも、原料や機械の生産においては比較的多數の労働者が雇傭されるといふ事情ではない。これはたゞ分業にすぎない。」(剩餘價值學說史第三卷、改造社全集版、四二〇—四二二頁)

かくて著者が生活資料を以て、労働者に對立せしめられてゐることは次第に明かになる。即ち、著者は「商品一單位當りの消耗不變資本を減少せしめつゝ爲される所の未消耗不變資本の

増加は、必ずしも「少くとも一時的には、労働者の利益に反する」とは限らない。」とて、J.S.ミルに、従つてまたリカルドに反對される。即ち、著者によれば、「固定資本の固定期間の延長は、……生産的労働力需要量に對して、何等の變化をも來さない。唯此處で注意すべきは、消耗資本額に就いて見る限り、資本の價格組成は低級化しゐる。」(二九八頁)のであり、リカルドに對立し、「生活必需品生産部門の資本が織物業に移されるならば、然る限りに於て、織物労働者の需要が増し、然る限りに於いて、生活必需品に對する需要が増し、然る限りに於いて、生活必需品生産部門の労働需要が増す筈である。」(三〇八頁)と云はれる。かくて、勢ひ、「解雇された職工の勞銀より成つてゐた貨幣額の一部が再び機械職工に支拂はれると言ひ得る爲には、社會的資本の總額がそれに照應して増加して居らねばならないと言ふ事を看過せる所に、所謂補償説の誤謬の第一歩がある事」(三二六頁)を指摘されつゝも、「單なる所要労働量減少は、即ち單なる生産費節減は、資本を解放する事に依つて、他の方面での労働需要を生ぜし得る。」(三二六頁、傍點は引用者)と主張されることになる。

かくて、「資本主義經濟に内在せる諸多の矛盾」(一六六頁)を指摘するこの著者の、「補償説の誤謬」指摘は、まさに著者の謂はゆる「マンゴルトの去勢されたる労働者排除説」(一〇頁)と同一



に歸する。この矛盾はJ・S・ミルに對して、「ミルは、リカルドよりも機械に因る勞働力の排除の問題に含まれる資本回轉期間の問題の面の分析に、ヨリ近づいてゐる。」(三一三頁)「機械の問題を、正鵠なる意味に於ける固定資本の問題として把握せる點に於いては、リカルドから一步進んでゐる。」(三一三頁)と述べられるところに明かな如く、耐久性といふ技術的・物理的な點で固定資本＝流動資本の區別をした、リカルド＝ミルの立場——ひとはこゝでリカルドの「原料」が固定資本でもなければ流動資本でもないといふ「原料」の行衛不明の問題を、そして、著者の上述したリカルドに對する誤謬指摘を想起すべきである——の踏襲にもとづくものではないであらうか。而して、この資本の流通期間による固定資本＝流動資本の問題をもたらすことによつて、如何に生産費＝利潤の問題の解決のために、「勞働價值説の修正」が、リカルドからミルに到るまで企てられねばならなかつたことか——リカルドからミルに到る學說史は、謂はゆる固定資本＝流動資本の區別を以てしては、「機械は勞働者と等しく剩餘價值をつくることである。」(R. Liefmann, *Geschichte und Kritik des Sozialismus*, Leipzig, 1923, S. 144)と云ふことに落ちつくよりほかないことを示してゐる。

——〔終〕——

参考文献

- Albrecht, G. Rationalisierung. Wörterbuch der Volkswirtschaft, 4. Aufl.  
 Albrecht, Die Volkswirtschaftliche Bedeutung der Kleinkraftmaschinen. Leipzig, 1889.  
 Altschul, E. Die Arbeitslosigkeit und der technischen Fortschritt. Magazine und Wirtschaft vom 19. Juni 1931.  
 Babage, Ch. On the Economy of Machinery and Manufactures, 2ed. London, 1832.  
 Baines, E. History of the Cotton Manufacture in Great Britain. London, 1835.  
 Bakke, E. W. The Unemployed Man, A Social Study. London, 1933.  
 Ballod, K. Die Produktivität der industriellen Arbeit. Schmollers Jahrbuch, Bd. 34, 1910.  
 Bargheer, Der Arbeitsmarkt in der Rheinprovinz. Düsseldorf, 1925.  
 Bauer, O. Kapitalismus und Sozialismus nach dem Kriege. Erster Band. Rationalisierung-Fehl-rationalisierung. Wien, 1931.  
 Bauer, Die Sozialpolitische Bedeutung der Kleinkraftmaschinen. Berlin, 1907.  
 Baum, Fabrikarbeit und Frauenleben. Verhandlungen des 21. evangelisch-sozialen Kongresses. Göttingen, 1910.  
 Beckman, Beiträge zur Geschichte der Erfindungen, I Bd. Leipzig, 1782.  
 Berger, G. Arbeitslosigkeit im deutschen Steinkohlenbergbau in der "Arbeitslosigkeit der Gegenwart."



- brg. von M. Saitow. München u. Leipzig. 1932.
- Bernay, M. Berufswahl und Berufschicksal des modernen Industriearbeiters. Archiv f. Sozialw. Bd. 35—36.
- Bernhard, Höhere Arbeitsintensität bei kürzerer Arbeitszeit. Schmollers Forschungen. Bd. 138. Leipzig. 1900.
- Beyer, Fr. Ch. Die volkswirtschaftliche und sozialpolitische Bedeutung der Einführung der Setzmaschine in Buchdruckgewerbe. Karlsruhe. 1910.
- Birk, L. V. Technischer Fortschritt und Überproduktion. Jena. 1927.
- Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins. 1884.
- Bounistian, M. Les progrès techniques et le chômage. Revue internationale du travail. Mars. 1933. (經濟學論集三卷六號)
- Bonn, M. J. Technische und wirtschaftliche Rationalität. In "Die Bedeutung der Rationalisierung für das deutsche Wirtschaftsleben." Berlin. 1928.
- Borch, v. d. Beruf. Gesellschaftliche Geisterung und Betrieb im Deutschen Reich. Leipzig. 1910.
- Borrmann, K. Die deutsche Zigarettenindustrie. Tübingen. 1910.
- Brassay, Work and Wages. London. 1872.
- Brauns, H. Der Übergang der Handweberei zum Fabrikbetrieb in der niederrheinischen Samt- und Seidenindustrie u. s. w. Leipzig. 1906.

- Brentano, F. Ueber die Ursachen der heutigen sozialen Not. 2Aufl. Leipzig. 1839.
- Derselbe, Ueber das Verhältnis von Arbeitslohn und Arbeitszeit zur Arbeitsleistung. 2Aufl. Brougham, The Results of Machinery. London, 1831.
- Brougham, Rights of Industry. (Capital & Labour) London. 1831.
- Brown, A. B. The Machine and the Worker. London. 1934.
- Brückmann und Weber, Neu-Erfindene Elementar-Maschine. Cassel. 1720.
- Buret, De la misère des classes laborieuses à l'Angleterre et en France. Paris. 1841.
- Butler, H. B. Probleme der Arbeitslosigkeit in den Vereinigten Staaten. Internationales Arbeitsamt. Studien u. Berichte. Reihe C. Nr. 17.
- Chase, St. Men and Machines. 1929. (邦譯)
- Chase, St. The Economy of Abundance N. Y. 1934.
- Chevalier, Zwölf nationalökonomische Vorträge. Deutsch. Leipzig. 1856.
- Dahlberg, A. Jobs, Machines and Capitalism. New York. 1932.
- Diehl, K. Theoretische Nationalökonomie. I. Bd. §48. Jena. 1924.
- Derselbe, Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu D. Ricardos Grundgesetzen und Besteuerung. Leipzig. 1905.
- Derselbe, Arbeitsintensität und 8-Stundentag. Jena. 1923.
- Derselbe, Maschinenwesen. Wörterbuch der Volkswirtschaft. 4Aufl.



- Derselbe, Die sozialpolitischen Bedeutung des technischen Fortschrittes. Jahrb. f. Nat. N. F. Bd. 36. 1908.
- Diehl und Mombert, Ausgewählte Lesestücke zum Studium der politischen Oekonomie. Bd. 20. Arbeiter und Maschine. 1926.
- Diels, H. Antike Technik. 3Aufl. Leipzig. 1924.
- Dietsel, H. Technischer Fortschritt und Freiheit der Wirtschaft. Bonn u. Leipzig. 1922.
- Derselbe, Das Produktionsinteresse der Arbeiter und die Handelsfreiheit. Jena. 1903.
- Eggert, W. Rationalisierung und Arbeiterschaft. Berlin. 1927.
- Ehrenberg, R. Die Unternehmungen der Gebrüder Siemens. Jena. 1906.
- Engels, F. Die Lage der arbeitenden Klassen in England. 2Aufl. Stuttgart. 1892. (邦譯)
- Ergang, G. Untersuchungen zum Maschinenproblem in der Volkswirtschaftslehre. Karlsruhe. 1911.
- Derselbe, Friedrich der Grosse in seiner Stellung zum Maschinenproblem. Jahrbuch des Vereins deutscher Ingenieure, Bd. 2. 1910.
- Ertel, J. Die volkswirtschaftliche Bedeutung der technischen Entwicklung in der Celluloidindustrie. Leipzig. 1909.
- Eswein, Elektrizitätsversorgung und ihre Kosten. Berlin. 1911.
- For, The Triumphant Machine.
- Frens, G. Kritik des Taylorsystems, Berlin. 1920.

- Friedländer, Rob. Chronische Arbeitskrise. Berlin. 1926.
- Fuss, H. Rationalisierung und Arbeitslosigkeit. Internationale Rundschau der Arbeit. August. 1928.
- Derselbe, Wirtschaftliche Rationalisierung und Arbeitslosigkeit. Arbeit und Beruf. Oktober. 1927.
- Gaskell, P. Artisans and Machinery. London. 1836.
- Gaskell, P. The Manufacturing Population of England. London. 1833.
- Gerharde, J. Rationalisierung. H. d. St. 4Erg.-B.
- Derselbe, Arbeitsrationalisierung und persönliche Abhängigkeit. Tübingen. 1925.
- Goldstein, Soziologie der Technik. Internationale Wochenschrift für Wissenschaft, Kunst, Technik. 1909.
- Derselbe, Irrationale Momente der modernen Technik. Elektrotechnische Zeitschrift. 1910.
- Gorfinkel, Die Probleme der Arbeitslosigkeit in der Epoche des Monopolkapitalismus. Unter dem Banner d. Marxismus. III. Jahrg. Heft 2. 1930. (邦譯)
- Gottl-Ottolissenfeld, v. Wirtschaft und Technik. G. d. S. Abt. I. Teil I. Tübingen. 1923.
- Derselbe, Von Sinn der Rationalisierung. Jena. 1929.
- Derselbe, Arbeit als Tatbestand des Wirtschaftslebens. Archiv f. Sozialw. u. Sozialp. Bd. 50. Tübingen. 1923.
- Grdfic, G. Rationalisierung, Arbeitslosigkeit und Arbeitseiterverkürzung. Berlin. 1935.
- Grossmann, H. Die Bedeutung der chemischen Technik für das deutsche Wirtschaftsleben. Leipzig. 1907.



- Grothe, Über die Bedeutung der Kleinmotoren als Hilfsmaschinen für das Kleingewerbe. Jahrbuch f. Gesetzgebung. u. s. w. VII.
- Hammel, Der Elektromotor im Kleingewerbe und Handwerk. Frankfurt a. M. 1910.
- Heidebrock, E. Maschine und Arbeitslosigkeit. Berlin. 1922.
- Heiss, C. in Schmollers Jahrbuch. Band 25. 1901.
- Held, Zwei Bücher zur sozialen Geschichte Englands. 1891.
- Hellpach, Die Erziehung der Arbeit. Berlin. 1925.
- Hermann, E. Technische Fragen und Probleme der modernen Wirtschaft. Leipzig. 1891.
- Derselbe, Technischer Fortschritt und Seelische Gesundheit. Halle. 1907.
- Herkner, H. Arbeiterfrage. 7. Aufl. Berlin. 1921.
- Herkner, H. Arbeitszeit. in H. d. St. W. 4. Aufl.
- Hertz-Seidel, Arbeitszeit, Arbeitslohn, und Arbeitsleistung. Berlin. 1923.
- Heyde, L. Die Volkswirtschaftliche Bedeutung der technischen Entwicklung in der deutschen Zigaretten- und Zigarrenindustrie. Stuttgart. 1910.
- Heyde, L. Rationalisierung und Arbeiterschaft. in "Strukturwandlungen der deutschen Volkswirtschaft." Berlin. 1928.
- Hinmenthal, H. Kompensationstheorie. Technik und Wirtschaft. Oktober. 1932.
- Hirsch, J. Rationalisierung und Arbeitslosigkeit in "Die Bedeutung der Rationalisierung für das

- deutsche Wirtschaftsleben." hrsg. von der Industrie- und Handelskammer zu Berlin. Berlin. 1928.
- Hobson, J. A. The Evolution of Modern Capitalism. New and Revised Ed. London. 1926. (邦譯)
- Hobson, J. A. Rationalisation and Unemployment. London. 1930.
- Horst, Mechanisierte Industriearbeit.
- Internationales Arbeitsamt, Arbeitszeit und Arbeitslosigkeit. Genf. 1933.
- Dasselbe, Die sozialen Auswirkungen der Rationalisierung. Genf. 1932.
- Kähler, A. Die Theorie der Arbeiterfreisetzung durch die Maschine. Leipzig. 1933.
- Derselbe, The problem of verifying the theory of technological unemployment. Social Research. November. 1935.
- Kammerer, O. Die Technik der Lastenförderung, einst und jetzt. 1907.
- Derselbe, Die Ursachen des technischen Fortschritts. Leipzig. 1910. Sonderabdruck. Ueber den Einfluss des technischen Fortschrittes auf die Produktivität. Schriften d. Vereins für Sozialpolitik. Bd. 132.
- Derselbe, Über die Tongewinnung durch Trockenbagger. Protokoll des Deutschen Vereins für Ton- und Zement- und Kalkindustrie. E. V. 1910.
- Derselbe, Der Ersatz des Handarbeiters durch die Maschine in Bergbau. Zeitschrift des Verbandes Deutscher Ingenieure. 1910.
- Derselbe, Entwicklungslinien der Technik. Technik u. Wirtschaft. 1910.
- Derselbe, Mensch und Maschine. Zeitschrift d. Verbandes Deutscher Diplom-Ingenieure. 1910.



- Kapp, E. Grundlinien einer Philosophie der Technik. Braunschweig. 1877.
- Karmarsch, Geschichte der Technologie seit d. Mitte d. 18. Jahrhunderts. München. 1872.
- Kautsky, K. Karl Marx' Ökonomischen Lehren. 25. Aufl. Berlin. 1930. (邦譯)
- Derselbe, Schneller über den Fortschritt der Arbeiterklasse. Die Neue Zeit. 1904.
- King, W. I. The Relative Volume of technological Unemployment. Journal of American Statistical Association. 1933.
- Köner, A. Die industrielle Maschine in der Volkswirtschaft. Zeitschrift f. Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung. Bd. 4.
- Kulischer, J. Zur Entwicklungsgeschichte des Kapitalismus.
- Derselbe, Der Kapitalgewinn im 19. Jahrhundert. Jahrb. f. Nationalökonomie. N. F. Bd. 25. 1903.
- Kusinski, J. u. M. Die Lage des deutschen Industrie = Arbeiters. Berlin. 1931.
- Lang, Die Maschine in der Rohproduktion. Berlin. 1904.
- Lang u. Hellpach, Gruppenfabrikation. Berlin. 1922.
- Lauderdale, J. M. Earl of. An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth and into the Means and Causes of its Increase. Edinburgh. 1804. 2nd ed. 1819. (Deutsch. Über Nationalwohlstand.)
- Lederer, E. Technischer Fortschritt und Arbeitslosigkeit. Tübingen. 1931.
- Derselbe, Die Umwälzung in der Wirtschaft und die 40-Stundenwoche. Berlin. 1931.

- Derselbe, Die Wirkung von Lohnbaues. Tübingen. 1931.
- Lehmann, M. R. Echte Rationalisierung als Zentralproblem positiver Wirtschaftspolitik. Leipzig. 1931.
- Derselbe, Rationalisierung und Sozialpolitik. Nürnberg. 1930.
- Levenstein, Die Arbeiterfrage. München. 1912.
- Levi, L. Work and Play.
- Levis, W. Maschinenwesen. Handwörterbuch der Staatswissenschaften.
- Lesser, G. Die Freisetzung des Arbeiters durch die Maschine. Hamburger Wirtschaft. und Sozialwiss. Schriften. Rostock. 1928.
- Levenstein, Die Arbeiterfrage. München. 1912.
- Liefmann, R. Ertrag und das Einkommen auf der Grundlage einer rein subjektiven Wertlehre. Jena. 1907.
- Ludwig, H. Die Arbeitslosigkeit in der deutschen Automobil-Industrie in "Die Arbeitslosigkeit der Gegenwart." hrsg. von Satzow.
- Lux, Der Kleinmotor und das Kleingewerbe. Sozialpol. Zentralblatt. IV.
- Mahr, A. Hauptprobleme der Arbeitslosigkeit. Wiener Staats- und Rechtswiss. Studien. Bd. XX. Leipzig u. Wien. 1931.
- Malthus, Th. R. Principles of Political Economy. 2ed. London. 1836.
- Mangold, H. v. Volkswirtschaftslehre. Stuttgart. 1868. (8. Kap.)



- Manntadt, H. Die Kapitalistische Anwendung der Maschinerie. Jena. 1905.
- Marx, Untersuchungen über die Organisation der Arbeit. 2Auffl. Tübingen. 1885.
- Marr, H. Von der Arbeitseinnahme unserer industriellen Massen. Ein Beitrag zur Mensch und Maschine. 2Auffl. Frankfurt a. M. 1924.
- Derselbe, Proletarisches Verlangen. Jena. 1911.
- Marshak, J. Technischer Fortschritt und Arbeitslosigkeit. Gesellschaft. Feb. 1932.
- Marshall, A. Principles of Economics. 1st ed. 1890. 8th ed. 1930 (邦譯)
- Marx, K. Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie. hrsg. von F. Engels. (邦譯)
- Derselbe, Theorien über den Mehrwert. Aus dem nachgelassenen Manuskript "Zur Kritik der Politischen Ökonomie von Karl Marx." hrsg. von K. Kautsky. 3Bände. 1901—1910. (邦譯)
- Matäre, Die Arbeitsmittel, Maschine, Apparat, Werkzeug. München. 1931.
- Matschos, Geschichte der Dampfmaschine. Berlin. 1901.
- Derselbe, Die Entwicklung der Dampfmaschine. Berlin. 1908.
- Matschos, C. Friedlich der Grosse als Beförderer des Gewerhefleisses. Berlin. 1912.
- Matthes, C. Die Rationalisierung der Wirtschaftsprozesse. Zürich. 1932.
- Menold, Der Einfluss der Maschine auf die Entwicklung der gewerblichen Betriebsformen. u. a. w. Erlangen. 1908.
- Merckel, Ingenieurtechnik im Altertum. Berlin. 1899.

- McCulloch, J. R. The Principles of Political Economy. Edinburgh. 1835.
- Mill, James. Elements of Political Economy. 1821. 2nd ed. 1824.
- Mill, J. S. Principles of Political Economy, with some of their Applications to Social Philosophy. London. 1848.
- Mitsutaki, M. Kapitalbildung und Arbeitslosigkeit. Archiv f. Sozialw. u. Sozialp. Heft 1. Tübingen. 1931.
- Moeller, H. Rationalisierung und Arbeitslosigkeit. Weltwirtschaftliches Archiv. Bd. 34.
- Müller, G. Handwerkszeug und Handwerksmaschine. Leipzig. 1906.
- Mumford, Technics and Civilization. 1934.
- Münsterberg, H. Psychologie und Wirtschaftsleben. Leipzig. 1917.
- Nansouty, Le Machinisme dans la Vie quotidienne. Paris. 1909.
- Naumann, Deutsche Gewerbekunst. 1908.
- Naumann, Die Kunst im Zeitalter der Maschine. Berlin-Schöneberg. 1908.
- Zur Nedden, F. Technischer Geist und nationalwirtschaftliches Leben. Technik u. Wirtschaft. Juni 1933.
- Neuburger, A. Die Technik des Altertums. Leipzig. 1919.
- Nicholson, J. S. Effects of Machinery on Wages. London. 1892.
- Niebuhr, H. Die Arbeitslosigkeit in der deutschen eisenverarbeitenden Industrie. In "Die Arbeitslosigkeit der Gegenwart". hrsg. von Saizew.



- Nochinson, N. Die elektrotechnische Umwälzung. Tülich. 1910.  
 Noire, Das Werkzeug. 1880.  
 Öchelhäuser, v. Technische Arbeit einst und jetzt. Berlin. 1903.  
 Olk, F. Vor dem Zweiten Abschnitt der deutschen Rationalisierung. Arbeit. Heft 3. 1930.  
 Derselbe, Zu teuer rationalisiert! Arbeit. Heft 11. 1930.  
 Owen, R. Observations on the Effect of the Manufacturing System. 1815. & Other Essays in Everyman's Library. No. 799.  
 Passy, Les machines et leur influence sur le développement de l'humanité. Paris. 1886.  
 Penty, A. J. Die Überwindung des Industrialismus. Deutsch. Tübingen. 1923.  
 Penty, A. J. Toward a christian Sociology. 1922.  
 Pieper, A. Der Kapitalismus als seelisches Problem. 1924.  
 Popper, I. Die technischen Fortschritte nach der ästhetischen und kulturellen Bedeutung. 2. Ausgabe. Dresden. 1901.  
 Pound, A. The Iron Man in Industry. 1922.  
 Rebe, C. Die deutsche Schuhgrossindustrie. Jena. 1908.  
 Du Bois-Reymond, Erfindung und Erfinder. Berlin. 1906.  
 Pfeiffer, Ed. Technokratie. Stuttgart. 1933.  
 Rathenau, K. Der Einfluss der Kapitals- und Produktionsvermehrung auf die Produktionskosten in

- der deutschen Maschinenindustrie. Jena. 1906.  
 Reuleaux, F. Theoretische Kinematik. Bd. I. 1875.  
 Derselbe, Die Maschine in der Arbeiterfrage. Minden. 1885.  
 Derselbe, Kurzgefasste Geschichte der Dampfmaschine. Braunschweig. 1891.  
 Rosenstock, Werkstattkommuniste. Berlin. 1925.  
 Derselbe, Industrievolk. Frankfurt am Main. 1924.  
 Derselbe, Werkstattumsiedlung. Berlin. 1922.  
 Rothe, Beiträge zur Maschinen-Baukunde. Berlin. 1827.  
 Ricardo, D. On the Principles of Political Economy and Taxation, 1817. 3rd. 1821. (邦譯)  
 Ritterhausen, H. Arbeitslosigkeit und Kapitalbildung. Jena. 1930.  
 Say, J. B. Traité d'économie politique. 1e. édit. 1803. (邦譯)  
 Say, J. B. Lettres à M. Malthus sur différens sujets d'économie politique. Paris. 1826.  
 Saitsev, M. Eine lange Welle der Arbeitslosigkeit in "Die Arbeitslosigkeit der Gegenwart." Schriften des Ver. f. Sozialpol. Nr. 185. München-Leipzig. 1932.  
 Salz, A. Über Arbeitswert und Arbeitslohn. Z. f. Volkswirtschaft, Sozialpolitik. u. Verwaltung. Bd. 20. 1911.  
 Salz, A. Die Kontrolle des technischen Fortschritts. Der deutsche Volkswirt. Jahrg. 6. H. 49. 51. 52.  
 Senior, N. W. An Outline of Political Economy. 1836. (邦譯)



- Schäfer, F. Die wirtschaftliche Bedeutung der technischen Entwicklung in der Papierfabrikation. Leipzig. 1909.
- Schiffle, Kapitalismus und Sozialismus. Tübingen. 1870.
- Schnoller, G. Ueber das Maschinenzeitalter in seinem Zusammenhang mit dem Volkswohlstand und der sozialen Verfassung der Volkswirtschaft. Berlin. 1903.
- Auslese mit Anpassung der Arbeiterschaft in der geschlossenen Grossindustrie. München. 1910—1912.
- Schöne, M. Die moderne Entwicklung des Schuhmachergewerbes. Jena. 1888.
- Schönhof, I. The Economy of High Wages. New York. 1892.
- Schulze-Gävernitz, v. Der Groszbetrieb. Ein wirtschaftlicher und sozialer Fortschritt. Leipzig. 1892 (邦譯)
- Schadwell, England, Deutschland und Amerika. Moderne Wirtschaftsprobleme I. Berlin. 1908.
- Sismondi, J. C. L. Sismonde de. Nouveaux principes d'économie politique. Paris. Tome. 1—2. 1819.
- Smith, A. An Inquiry into the Nature & Causes of the Wealth of Nations. 1776. (邦譯)
- Sombart, W. Die Gewerbliche Arbeit und ihre Organisation. Brauns Archiv für soziale Gesetzgebung. Bd. 14. 1899.
- Derselbe, Technik und Wirtschaft. Dresden. 1901.
- Derselbe, Der moderne Kapitalismus I. Bd. 3 Kap. München u. Leipzig. 1902.

- Derselbe, Die Zähmung der Technik. Berlin. 1935.
- Spengler, O. Man and Technics. 1932.
- Steffen, G. F. Studien und Geschichte der englischen Lohnarbeiter. Stuttgart. 1904.
- Stern, R. Technological Displacement of Labor and Technological Unemployment. Journal of American Statistical Association. 1933.
- Stewart, W. D. Mines, Machines and Men. London. 1935.
- Straus, W. Die Arbeitslosigkeit im deutschen Braunkohlenbergbau, "Arbeitslosigkeit der Gegenwart."
- Taylor, M. P. Common Sense about Machines and Unemployment. 1933. Chicago.
- Thirtieth & Fortseenth Annual Report of the Commission of Labour. 3Vols. Washington. 1889-1900.
- Thun, A. Die Industrie am Niederrhein und ihre Arbeiter. Leipzig. 1879.
- Torrans, R. An Essay on the Production of Wealth. London. 1821.
- Torrans, R. On Wages and Combinations. London. 1834.
- Triar, Die volkswirtschaftliche Bedeutung der technischen Entwicklung der deutschen Lederindustrie. Leipzig. 1909.
- Ure, A. The Philosophy of Manufacture. London. 1836.
- Urwick, L. Das Wesen der Rationalisierung. Stuttgart. 1933.
- Veblen, The Theory of Business Enterprise. New York 1923. (邦譯)
- Verschöfen, W. Ueber das Verhältnis von technischen Vernunft und wissenschaftlicher Wertung.



- Die Grenzen der Rationalisierung. Nürnberg. 1927.
- Verein für Sozialpolitik, Verhandlungen über Deutschland und die Weltkrise. Dresden. 1932.
- Waffenschmidt, W. G. Technik und Wirtschaft. Jena. 1928.
- Wagner, C. Konserven u. Konservenindustrie in Deutschland. Jena. 1907.
- Wasmuth, Wirtschaft und Kunst. Jena. 1909.
- Wagner, M. Tarifvertrag und Technik. Technik u. Wirtschaft. 1909.
- Voigt, A. Mechanisierung der Arbeit. Handwörterbuch der Staatswissenschaften.
- Webb, S. Die Stellung der britischen Gewerksvereine gegenüber der Einführung neuer Arbeitstechniken. Archiv für soziale Gesetzgebung. X.
- Weintraub, D. The Displacement of Workers through Increases in Efficiency and their Application by Industry. Journal of American Statistical Association. Dec. 1932.
- Watson, W. F. Machines and Men. London. 1935.
- Watts, F. Psychological Problem.
- Wernike, J. Der Kampf um den wirtschaftlichen Fortschritt. Jena. 1910.
- Weber, Adolf. Allgemeine Volkswirtschaftslehre. München-Leipzig. 1932. 4. Aufl. (§§§, 3, 30, 31.)
- Weber, M. Zur Psychophysik der industriellen Arbeit. Archiv für Sozialw. Bd. 17. u. 18.
- Wiase, I. v. Technik. Handwörterbuch d. Soziologie. 1931.
- Wilbrandt, R. Die moderne Industriearbeiterschaft. Stuttgart. 1926.

- Williams, ed. by. Man and the Machine. London. 1935.
- Woldt, R. Der industrielle Großbetrieb. Stuttgart. 1913.
- Wolf, Sozialismus und kapitalistische Gesellschaftsordnung. Stuttgart. 1892. (Vgl. Sommar's Kritik in Archiv f. S. G. V.)
- Woytinsky, W. Three Sources of Unemployment, the Combined Action of Population Changes, Technical Progress and Economic Development. Geneva. 1935.
- Zimmermann, W. Das Problem der rationalisierten Industriearbeit in sozialpsychologischer Betrachtung. Schmollers Jahrbuch. 49. Jahrg. 1925.
- Zöpfl, G. Nationalökonomie der technischen Betriebskraft. Jena. 1903.
- Zwiedineck-Südenhorst, Otto v. Beiträge zur Erklärung der strukturellen Arbeitslosigkeit. Archiv zur Konjunkturforschung. Berlin. 1927.

- Leupold, Theatri. Machinarum Hydraulicarum. Tomus I et II. Leipzig. 1724/5.
- Lotz, J. F. E. Handbuch der Staatswirtschaftslehre.
- Untersuchungen über die nachteiligen Wirkungen, die ökonomischer u. sittlicher Beziehung die stete Erweiterung des Fabrik-u. Maschinenwesens haben soll. Schweiz. Archiv für Statistik u. Nationalökonomie. 2 Bändchen. Basel. 1828.
- Der Einfluss des Maschinenwesens auf Quantität und Qualität der gewerblichen Produktion. Deutsch.











山口正均	失業の研究	昭和十年十二月	大阪弘済會授産場
山本征夫	産業合理化の批判	昭和五年十一月	春陽堂
時事新報社経済部編	第三期と失業問題	昭和六年十月	南雲書房
	日本産業の合理化	昭和五年七月	東洋經濟新報社

文獻はわたくしのためのものであり、極めて不備であるが、本書を批判し本書を補ふ意味で、つけ加へることにした。

跋

この書の成立は、もと昭和八年の夏、機械論の名のもとに綜合科學協會主催の夏期講習會に於て、主としてリカルドとマルクスの學說について述べたことに機軸する。「機械の經濟學」は、それをもとに綜合科學論叢の一冊として夙に出版される筈であつた。今、それがかゝる形態で世に送り出されるに至つたについては、篠原雄、清水幾太郎兩氏の好意に負ふところが多い。

もともと私は經濟理論乃至學史を専攻するものでなく、かつこの書の成立の事情もまた極めて偶然のことに屬する。經濟理論としては、より多くをリーダーに學んだ上で書かるべきであつた。社會主義の學說について述べるところがなかつたのは紙數の制限と研究の不足による。かうした意味で文字通り未熟なこの書は、而も敢て云ふなら「知識社會學の一つの演習」(新明正道氏、「社會學要講」一九六頁)に素材を提供するつもりでままとめられた。思想乃至理論形態が如何に社會と共に推移するか、またしないかについて一つの材料ともなれば幸ひである。かゝる考へ方が哲學上の唯物論を必要とせぬことは私が昭和八年以來今日に到るまでに學びえたところであつた。とまれ、この書は私の心覚えの手習草紙たる以上の意義をもつのではないけれど、これを以て私の社會學研究途上の捨石とし、かねて批判の鞭をお受けしたく、意に満たざるまゝに、原稿は印刷に廻されることとなつた。これを機會に、東大經濟學部の研究室を中心を受けた學恩、並びに昭和八年以來日本の社會が如何なるもの



であるかを教へられた方々に感謝の意を禁じえない。たと自ら酬いることの薄きを愼くのみ。

昭和十一年四月

著 者

學 濟 經 の 概 論		昭和十一年七月十日 發行刷
發 行 所	 	定價 金 一 圓
	著 者 戸 田 武 雄 東京市神田區駿河臺三丁目六番地 發行 者 關 根 喜 太 郎 東京市神田區駿河臺三丁目二〇番地 印刷 者 永 島 喜 代 次 郎 東京市神田區駿河臺三丁目二〇番地	東京市神田區駿河臺 三丁目六番地 刀 江 書 院 電話 神田 三三二一 東京 七三一七 八一九
所 刷 印 社 會 式 株 股 印 立 興		



新たなる頭腦による

新たなる眞理把握のために

もし虚偽の正反對が眞理であるとすれば、吾は現在社會に關する學問領域に於いてかくも氾濫溢せる虚偽と同數の眞理を既に所有してをらなければならぬ筈である。だが、吾々は果してこの目前の虚偽に拮抗し、いな、能くそれを超克し得るに足る眞理を、社會のあらゆる問題に關して、吾々のものとしてをるであらうか既に與へられたる眞理を形式的な體系のなかに敷へ入れることだけではもはや決して充分ではない。現在の虚偽は新しき頭腦と理性によつてその成立にまで問ひ詰められねばならず、虚偽の根源に溯及することによつて埋没され歪曲されたる眞理はいま發掘されねばならぬ。

吾々は茲に「社會哲學叢書」の刊行を企畫する。吾々は社會に關する科學の全領域に亘つて新鮮且つ眞實なる研究とそれら既往成果に對する批判とを目論む。著者はすべて新銳の學徒。内容は既に論ぜらるべくして而も忽諸に附せられむる理論的實踐的問題群。

幸ひに、社會に關する諸科學について新しき出發を志す若き學徒の協力を希んで止まぬ。

既刊書目

1 歴史意識 馬場啓之助  
2 機械の經濟學 戸田武雄

續刊書目

3 哲學的文學論 池島重信  
4 西田哲學の基本問題 瀧澤克巳  
5 生産の論理 梯明彦  
6 社會哲學 清水幾太郎  
7 教育社會學 尾高豐作  
8 近代社會心理 堀秀彦

各書四六判三二〇—二五〇頁 價各二圓



710  
123



